

ればと思います。

＜桑原＞

獣医師関係者は明日、学校飼育動物に関する情報交換会がありますので、獣医師関係者については、そのことをご理解いただいて、今日は「感性を揺さぶる飼育体験」について、どのような方策があるのかということについて、ご質問等をいただきたいと思います。

＜滋賀県小学校教師＞

私は、学校では環境委員をしていますが、飼育には直接関わっていません。飼育担当は学校では公使の方です。飼育というとたいへんだというイメージがあって、先生方があまり受け持つたがらないような雰囲気があります。土日にはウサギの水が足りなくなります。そこで、公使の方は、土日でも学校に来て、水が足らないと補給したりしてくれています。

私の学校では、雄のクジャクがいます。このクジャクは女の子には危害を加えないのですが、男性の先生や男の子には危害を加えます。なので、なかなか男の先生は世話をしてくれません。

また、ウサギはとても繁殖力が旺盛で、たくさん子どもを産みます。冬場には産まれた子どもが凍死していたりすることもあるので、公使の方が自費でカイロを買ってきてくれることもあります。去勢手術は、獣医師の方が1年に1頭ずつはしてくださいます。しかしつくさん産まれるしすぐ大きくなるので、1年に1頭ずつではとても間に合いません。

＜桑原＞

学校で飼っている場合、子どものためにどんな動物を選んだらいいのか、動物種の特性を良く理解して、攻撃性のある動物は飼うのを控えていただくことがいいと思います。増えすぎて困るというお話しさはどこの学校に行ってもいただくのですが、獣医師の立場とすると、雄と雌がいるから子どもが産まれるので、雄と雌を別々に飼う方法を考えたり、それぞれの学校で工夫をする必要があると思います。

＜中川＞

この問題に、あなたの学校の事情を見ないまま答えるのは難しいと思います。そして、1年に1頭しか去勢をしてくれないというお話しさは、獣医師と学校が対立する話ではなくて、両者が一緒に話し合って、解決方法を考えて、教育委員会を巻き込んで対策を考えるという問題だと思います。ということで、近くの獣医師さんと話し合っていただくか、連絡先がわからな

いときは、学校恣意動物研究会のホームページから私の方に連絡をいただくと、全国の獣医師会とつながっていますので、相談しながら解決方法を見つけられると思います。

＜西東京市青少年問題協議会＞

今日は教育関係の方が多いので、是非質問させていただこうと思います。

先ほど桑原先生が、文科省などから飼育をするときの基準などが示されることが望ましいとおっしゃっていましたが、それ以前の問題としては是非田村さんにお伺いしたいと思います。命の大切さということが教育現場で多く語られていますが、実際に学校では、餌や水を与えなかったりして小動物が死んでいているという事実もあります。教員を採用する時点で、命の大切さについて示すことができないのかどうかということが一点目です。私は市の青少年問題協議会に所属していて、中川先生たちと一緒に活動させていただいております。その中で、実際に小動物にさわることもできない先生がいることを目の当たりにしています。桑原先生がおっしゃったように、飼育基準が示されたとしても、そのような先生がいる限りは、命の大切さなどは教えることができないのではないかと思います。京都市にも教育関係者はたくさんいらっしゃると思いますが、今日の参加者を見てみても、少ない数しか集まってくれません。このような状況をどうお考えなのか、是非お伺いしたいです。

＜田村＞

今話していただいたことは、先ほど奈良の方が話されたことと非常に関係が深いと思います。今、子どもたちを取り巻く家庭環境や社会情勢が変わってきて、命は大切だと声高に叫ばなければならなくなってきた状況があります。ですから、獣医師の方々や地域の方々の力を借りしなければならなくなっています。教員にとっても、これまで以上に教師としての力量が求められてくるのではないかと思います。

中央教育審議会の中で、「学校力を鍛え、教師力を鍛え、子どもたちの人間力を育成する。」ということが言われています。その教師力の中には三つの定義があります。一つは教育に対する情熱、二つめはプロとしての専門性、三つ目は人間としての人間性であるということです。今お話しにあったことは、まさしく人間性のことであって、人間性を十分にもった教師が現場に出ているかどうか、ということが語られたのだと思います。そういう意味で、十分ではないところがあるのかもしれません、教職員の

研修会などを積極的に行って改善への努力をしているところであります。

また、人間性の問題は、個別の問題ですから、全体的な二項対立の問題にしていかないで、みんなで力を合わせて高めていく必要があるのでないかとも思っています。

生きものに対して、得意な先生もいれば、そうでない先生もいると思います。そのようなときに、組織やチームでそれをカバーできる体制ができているか、自治体等と連携をとって組織的に取り組んでいくことができるか、といったことが大切なことだと思います。

ここにいる皆さんには、みんな子どもたちのために何とかしようという方たちばかりだと思います。獣医師の皆さんと教育現場が対立する場ではなく、協力し合ってなんとか目的を達成できるようにしていこうとすることが必要なのではないかと思います。

ご質問いただいたことに正対した形にはなっていませんが、熱意のある力のある教師がいることも事実ですし、むしろそういった先生の方が多いのではないかと思います。熱意ある先生方の力に期待をしていただいて、みんなで力を合わせて、教育活動の質を高めていけたらいいなと考えています。

＜京都市幼稚園教頭＞

先ほど管理職の先生が…というお話しがありました。私は教頭なので、今日参加させていただいてとても良かったと思っています。

幼稚園は、人間としての基礎を培っていく大切な時期だという意識をもって、毎日子どもたちと接しています。動物を飼うことも大切なことだと思って飼っています。私は3歳の子どもを担任していて、先日子どもがウサギに水をかけてしまって、瀕死の状態になってしまったことがあります。そこで獣医師さんのところに連れて行ったんですが、もう手遅れでした。そんなこともありましたが、子どもたちが動物とかかわることはとても大事なことだと思っています。

若い先生も多いのですが、動物飼育に関する園内研修も実施しています。ただ、私が気になることは、小学校と幼稚園とでは、飼育動物に対する考えが少し違うのではないかと思ってきたところがありました。しかし、今日参加させていただいて、小学校も幼稚園も一緒なんだということがわかりました。動物飼育を通して命の大切さを学んで、そして将来大人になってからの生き方の基礎をつくることなんだというこ

とがわかりました。

それから、獣医師の先生に質問ですが、3歳の子どもたちが動物に触ることはとても大事なことだとは思うのですが、なかなか難しいところがあります。たとえば、さきほどウサギに水をかけたというお話しをしましたが、これは暑い夏の日だったので、ウサギが暑いだろうということで、子どもは水をかけたらしいのです。なので、3歳の子どもたちでも安全にふれあえるような動物ってあるのでしょうか。

＜中川＞

基本的に、3歳の子どもが動物とふれあっているときには目を離してはいけないんです。ぎゅっと握ってかまれることもあるので、お互いに危険なこともあります。また、ミドリガメなどを口に入れてしまうこともあります。だから、どの動物がいいということではなく、子どもたちが興味を持った動物を受け入れてあげることがまず大切なことだと思います。4歳くらいになると、私が携わっている幼稚園ではウサギを世話をようになり、5歳でチャボを世話するようになります。その幼稚園でも、3歳児の子に対しては、何を面倒見るというのではなくて、ハムスターインコを見て楽しんだり、大人が一緒に時にさわらせてもらったりということをしています。

事故が起きても仕方がないと思いますが、水をかけてしまったときなどは、「冷たくてかわいそうだね。」などという声かけがあるといいのではないでしょうか。慌てて拭いてあげたりするところを子どもたちが見れば、かわいそうなことをしてしまったと、どこかで感じるかもしれません。その程度でいいと思います。

＜桑原＞

事前にいただいたアンケートの中で、学校で動物を身近で飼う場合、たとえば教室や廊下などで飼う場合に、保護者の方から、自分の子はアレルギーだから飼わないでほしいとか、アレルギーへの対応はどうするのかというような意見が寄せられているようです。われわれも学校に伺っていると、「アレルギーがあるから飼えない。」というような学校も見受けられます。その辺の対応について、教育委員会としてどのようにお考えでしょうか。寺田先生お願いします。

＜寺田＞

私の経験でも、保護者から、アレルギーなの

で動物の飼育に関して配慮してほしいと言われたことはあります。しかし、このことがあったから今後一切ふれあわせることはしないということではないのです。「配慮」というのはどの程度のことを言うのか。たとえば、教室に動物がいるだけでアレルギーを起こすようなことになるのかどうか、ということは保護者に聞きます。それは、保護者に対してだけではなくて、その子のかかりつけの医師などにも、どの程度の医療的な配慮が必要なのかということも聞くようになっています。そのようにして、できる範囲の中で、アレルギーの子どもでも観察することだけでもかかわるようなことを考えています。

もう一つこういう例もあります。「うちの子は動物にアレルギーがあるので、動物園の遠足は行かせません。」という話もありました。そのようなときに、動物園という広い範囲で見るのでなくして、特定の動物でアレルギーを起こすのではないか、専門医の方はどのように話しているのか、というようなところまで話を深めておくことが必要だと思います。このように、保護者の話を聞いた上で、できる範囲はどこまでなのか、ともに探っていくことが大切なことだと思います。

<桑原>

時間も迫ってきましたので、もうひと方だけ質問を受けたいと思います。

<――>

勉強不足な質問かもしれません、私が小学校の時に、動物が好きだったのでずっと学校では飼育委員をしていました。ある時ウサギが病気になって、担任の先生や校長先生に病院に連れて行ってほしいと行ったのですが、予算の関係で連れて行ってもらえないで、結局手遅れで死んでしまったことがあります。また、知識のない先生が、小屋が1つしかないのにつがいをもらってきて、ウサギが増えてしまったので、去勢をしてほしいと頼んだんですが、なかなかしていただけなかった現状があります。そこで、動物にかける予算は、各学校単位で確保されているのか、もっと大きな単位で確保されている

のか、そのところがずっと疑問だったので、教えていただければと思います。

<中川>

その場所はどこですか？

<――>

群馬県です。

<中川>

群馬県は、獣医師さんと相談していただければ大丈夫です。

先ほどの予算のことですが、私たちが担当している学校は、市からの委託です。指導を兼ねた最初の契約だったので、教育委員会はごく常識的な金額を付けてくれました。つまり、前年度の治療費に見合った額とし、それを治療費ではなく、委託費として計上しました。そうしたら、1校56,000円でした。今19校ありますが、合計108万円、人口は20万人です。その後の契約はだんだん減額され、ひところは、1校1万円。政令指定都市の場合は百何十校あって99万円。川崎市や横浜市がそうです。しかし最近では、実績を踏まえて、300万円くらいつくところもあります。そして、それぞれの地域の獣医師がどのような学校への関わり方をするかなど、獣医師の研修も必要ではないかと思います。長年の歴史で、このような飼い方です一いつときてしまった。それを今、その飼い方ではまずいということがいろいろなところから出てきたので、文科省も動き出したところだと思います。大切なことは、田村先生がおっしゃったように、みんなで子どもたちのために何ができるかを考えるということだと思います。

<桑原>

いろいろありがとうございました。時間が来ましたので、これで総合討論を締めさせていただきたいと思います。

今日ご来場いただいた皆様方には、動物をどのように子どもたちにふれあわせ、どのように克証することが、教育的に有効であるか、十分ご理解いただけたことだと思います。地元に帰られましたら、今日お感じになったことを十分広めていただければと思います。

まとめ

唐木英明

ご紹介いただいた唐木です。

今日のテーマは、「感性を揺さぶる飼育体験—動物の力を教育に—」ということですので、このテーマについて一言だけお話しをさせていただきます。

まず、「感性」ということですが、感性とは理性と対比して使われる言葉です。そして感性はわれわれの理性の中にある情動のことを言います。情動には喜びとか悲しみとか怒りとかいろいろなものがありますが、私たちが生きていって絶対に必要な情動が二つあります。一つは恐怖感です。恐怖感があるからわれわれは危険なことから逃げて、自分の命が助けられるわけです。これが自己保存の本能につながるわけです。もう一つ大事な情動が愛着です。愛着があるから種の保存ができます。また愛着は、他者を思いやる心であり、他人にいやな思いをさせないという理性の働きにもつながるという、非常に重要な情動だということができます。

そこで、恐怖にしても愛着にしても、それを呼び出すための対象が必要です。私たちは生まれたときからこの二つの情動を本能としてもっていますが、それをきちんと機能させるためには、練習が必要です。子どもたちは二つの情動の対象を求めているという話もあります。子どもがお化け屋敷が好きなのは恐怖の対象を求めているといっていいかどうかわかりませんが、愛着の対象は常に求めています。その結果として、子どもは皆動物が好きだということに結びつくのかもしれません。先ほどもお話しがありましたとおり、9割の学校で動物を飼育しています。そしてその動物を子どもたちの愛着の対象にしていきたいということが、この研究会の目的であるということができると思います。そ



してその手段が飼育体験ということになるわけで、今日のタイトルである「感性を揺さぶる飼育体験」につながるわけです。人形や、ましてはコンピュータの中で暴れ回るキャラクターは、愛着の対象には成り得ないということは、鳩貝先生がお話しになったとおりで、直接の体験が絶対に必要なわけで、田村先生がお話しになったように、「体験あって学習なし」でもいけないわけです。そして、テーマの後半部分の「動物の力を教育に」ということが、お二人の先生のお話につながるものだと思います。どのような体験を学習に結びつけるのかということが大切なわけですが、その辺についても今日はいくつかの実例のお話しがありました。これからも教員の皆さんのがんばりが必要になり、われわれ獣医師はそれをサポートするということになりますが、これからもこの二者が協力し合い、子どもたちの感性の発達のため、教育のために役立てるための道を探していくたいと思います。

(東京大学名誉教授 日本学術会議会員)

